

# 碑に込められた想い

## 牛馬にまつわる碑



区内に残る碑の中で最も多いのが、牛や馬にまつわる碑です。「馬頭観世音<sup>ばとうかんぜおん</sup>」、「牛馬塔<sup>ぎゅうばとう</sup>」、「馬頭大神<sup>ばとうだいじん</sup>」など刻まれた碑名に違いはありますが、いずれも牛馬を供養するために先人たちが建立したものです。

機械などなく、開墾作業のほとんどが人々の手で行われていた時代に、開拓者たちを陰で支えていたのが、牛や馬などの家畜でした。荷物を運び、田畑を耕し、さらに牛の乳は貴重な現金収入ももたらしました。馬や牛たちは厳しい北海道の自然の中で苦楽を共にするかけがえのない家族の一員だったのでしょう。

このような碑は、写真の富丘や稲穂地区のほか手稲本町、手稲山口、前田、新発寒にもあります。移設された碑もありますが、区内の各地で馬や牛とともに農業に打ち込んでいた当時の人々の姿がしのべれます。

〈写真〉

(上)馬頭観世音 建立年：明治45年(1912年)7月 富丘4条4丁目真妙寺境内  
(下)牛馬供養塔 建立年：昭和26年(1951年)10月 稲穂3条5丁目稲穂会館敷地内



## 前田自作農記念碑

建立年：昭和11年(1936年)8月  
前田8条11丁目前田中央会館横

明治28年(1895年)に旧加賀藩主・前田利嗣侯が設立した「前田農場」。地名の由来となったこの農場は、泥炭湿地で農耕に適さなかった地域に酪農を始め、東北の小岩井農場と共に大農場経営の手本とされました。

しかし、大正末期になると競争の激化や小作人の自立要求などにより経営規模の縮小が図られました。手稲村も北海道から「自作農創設維持資金」を借り受け、それを小作人に転貸する方法で自作農の創設を後押しし、昭和7年から10年までの間に、前田地区の51世帯が自作農として独立を果たしました。自作農となった喜びは、言葉に表せないほどの感激に満ちていたといえます。碑は、長年にわたり小作人として汗を流した人々の独立を記念して建てられたものです。

手稲山のふもとに広がる私たちの手稲。その歴史は各地に入植した人々の苦勞の歴史でもありました。「自移民」という後ろ盾のない入植は困難を極め、挫折し、土地を離れる人も多かったといえます。

そのような中で、助け合い、努力し、開拓を続けた先人たちがいたことを碑は語りかけます。



手稲区役所では、さまざまな手稲の歴史をまとめた郷土誌『手稲でみつけた手稲のはなし』を手稲区役所ホームページで公開しています。

(URL <http://www.city.sapporo.jp/teine/tthanashi/index.html>)

区内の皆さんが集まった『手稲の語り部編集委員会』が、たくさんの方に話を聞き、約1年かけて編集し平成12年に発行した郷土誌です。どうぞご覧ください。